

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	令和2年度第1回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和2年7月27日(月) 14:00～16:00
開催場所	市民交流プラザIKODE瓦町 健康ステーション 大会議室
議 題	(1) 第2次高松市創造都市推進ビジョンにおける令和元年度実績について (2) 新型コロナウイルス感染症の影響と主な対応について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、真鍋副会長、西成委員、三井委員、中西委員、香西委員、平野委員、橋本委員、原委員、篠田委員、西村委員、渡邊委員
事務局	長井創造都市推進局長、石川産業経済部長、吉田文化・観光・スポーツ部長、西岡産業振興課長、白井農林水産課長、上原市場管理課長補佐、渦岡観光交流課長補佐、吉峰観光エリア振興室長、三宅都市交流室長、高本スポーツ振興課長、川畑美術館美術課長、三浦産業振興課創造産業係長、松下産業振興課主任主事
傍聴者	2人 (定員 3人)
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

1 開会

【会長】

新型コロナウイルス感染症の影響で、全世界がこれまで経験したことがないような状況に突入している。日本社会も、この先どういうふうに展開するべきなのか、誰も回答できない状態にある。創造都市という考え方は、私はあえて、このコロナの時代あるいはコロナ後を考えて、とても大事な概念になってくると思っているので、是非、今後、この審議会でも、将来を見通した活発で建設的な議論を進めていただきたいと考えている。

2 議題（1）第2次高松市創造都市推進ビジョンにおける令和元年度実績について

【事務局】

（配布資料について説明）

【会長】

それでは、この議題に関連して、事前に質問等をいただいた委員がいらっしゃるので、内容について御説明願いたい。

【委員】

「参考資料1-1」を御覧いただきたい。この議題については、成果と達成度ということがあるのだが、1つ目は、今まで事業を通して、つながった人や様々なネットワークを、多方面でつなぎ合わせるような仕組みづくりを、再度、検討して、最大限の効果を上げていく必要があると感じている。2つ目は、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きい中で、大規模災害が発生したり、他の影響だったり、今後の都市の在り方であったり、様々なイベントに対する迅速な対応ができるように準備をしていくことも必要だと感じている。

【委員】

「参考資料1-2」を御覧いただきたい。香川又は高松の工芸をアピールする拠点を創出することが必要ではないかと感じている。ちょうど一週間ほど前に、香川漆芸の大谷早人氏が人間国宝に認定され、ちょうど今、市美術館の一角で素晴らしい作品を展示されているが、そういうところをもっと広く伝わるようになればよい。

伝統工芸のアピールの方法については、伝統工芸は全国の場所によっていろいろあるので、情報交換やフォーラムのようなものを、今だからできるような、いろいろなことを発見していく中で、人が移動するのではなく、オンラインの形式を活用するということを、率先して、高松が進めていくことができればよいのではないかと考える。そういったところについても、もう少し戦略的に進めていくと、高松としての顔が見えてくるのではないかと思っている。

【会長】

それでは、今の御意見に対して事務局から回答なり、今、考えていることなどがあればお願いしたい。

【事務局】

まず、「参考資料1-1」の1つ目の御意見のユネスコ創造都市ネットワークに関する情報については、本市が幹事団体として参加している「創造都市ネットワーク日本」を支援する、文化庁の「文化芸術創造都市推進事業」の成果報告書の中で、ユネスコ創造都市ネットワーク総会の結果内容等が報告されているところである。本市のユネスコ創造都市ネットワークへの申請については、申請分野の選定や認定に必要な要素となるソフト事業やハード施設の充実のために、まずは、現在、取り組んでいる創造都市を推進するための各種事業を着実に執行していき、創造都市としての熟度を高めていくという方針である。今後の事業の実施に当たっては、「創造都市ネットワーク日本」の事業への参画や文化庁からの「成果報告書」、さらには、本審議会での情報提供を基に、他都市の取組を参考にしながら、本市の取組を充実させていきたいと考えている。

2つ目の御意見の多くの団体等との連携の仕組みづくりについて、本市としては、「高松市自治基本条例」及び「高松市自治と協働の基本指針」の下、市民の自主性と自立性を尊重しながら、地域コミュニティ協議会を始めとした市民活動団体等と、補助や共催といった様々な形で連携しつつ、多くの取組を進めているところである。御提案の趣旨も踏まえて、今後、市民の創造性を発揮するための効果的な仕組みづくりを検討してまいりたい。併せて、本審議会や創造都市推進懇談会（U40）の場においても御意見をいただきつつ、今後の厳しい財政状況においても、多くのパートナーシップの協力の下、「魅力にあふれ、人が輝く創造都市」の実現に向けて取り組んでまいりたい。

3つ目の御意見の「成果一覧」（資料2）については、創造都市の推進度合いを示す1つの参考値として、第2次高松市創造都市推進ビジョンにおいて「現況値からの向上を目指す」こととさせていただいている「成果指標」の進行管理を行うために、各指標の実績値を一覧にまとめたものである。次期ビジョン策定において、今後の創造都市の推進に当たって「課題」や「引継事項」があれば、具体的な御意見や御審議をい

ただきたい。

「参考資料 1 - 2」の 1 つ目の御意見について、常設の場を新たに設けることは、施設・人員の確保の面から難しいため、工芸品を収蔵している美術館や歴史資料館等の既存施設と連携し、伝統工芸品の展示方法を工夫する中で、新たな情報発信方策を検討していきたい。

2 つ目の御意見について、本市の伝統工芸については、香川漆器・庵治石・盆栽を始めとする 2 3 品目を伝統的ものづくりとして指定し、普及啓発や事業者への支援に取り組んでいるところである。また、創造都市推進懇談会（U 4 0）委員の発案で一昨年に行われた「たかまつ工芸ウィーク」について、昨年度からは、商工団体や事業協同組合、販売店とともに実行委員会を立ち上げ、事業者間のつながりを深め、高松を工芸の発信地として広く内外にアピールする取組を開始したところである。御提案いただいた Z O O M などを用いた他の地域との情報交換やフォーラムの開催については、「たかまつ工芸ウィーク」の P R 手法の 1 つとして、同実行委員会に御紹介させていただきたい。

3 つ目の御意見の「高松まちかど漫遊帖」については、「市民ツアープロデューサー」及び「ツアーガイド」から構成される「高松まちかど漫遊帖実行委員会」を実施主体とした、春と秋の年 2 回のガイドブック作成が主な活動内容である。漫遊帖の H P については、構成員の「市民ツアープロデューサー」が自主的に作成・更新をしているものであるが、御指摘のとおり、読みづらさや情報発信の面で課題があることは、市としても認識しているところである。また、本事業の今後については、完全な民間の自主事業化を目指しており、その中で、ガイドブック作成から W e b 上での情報発信への移行を進めていただいているところであり、御意見の趣旨を実行委員会においても共有するとともに、新しい H P へのアクセスが「エクスペリエンス高松」からも可能になるなどといった、U I 及び U X を意識しながら、事業の改善に努めていきたい。

4 つ目の御意見については、「資料 1」項目 3 においても、「創造都市の実現のための機運醸成に向けた取組」について御意見をいただいているところであるので、併せて、御意見の趣旨を踏まえながら、本市の事業の見せ方について、次期ビジョン策定の中で検討を重ねてまいりたい。本審議会においても、具体例等があれば御意見をいただきたいと考えている。

【会長】

今、事務局から説明をしていただいたが、他の委員から新たな意見や今出ている内容について御意見があれば、御発言をお願いしたい。

私は、「参考資料1-1」の中にあるユネスコ創造都市ネットワークとの関係性は、大変、大事な点だと思っており、実は3年ほど前に、高松市もユネスコ創造都市へ立候補しようかという機運が生まれたが、その時は、機が熟さずということで、少し様子を見るということになったままだが、その間、世界では246都市まで増えており、日本では9都市がユネスコ創造都市ネットワークに加盟している。そういうことを考えると、来年が、新たな申請の受付の年であることもあり、その検討を念頭に置いた方がよいかと思う。

【委員】

本審議会が設置されて、もう8年になり、事務局の方は、3年で変わるので、どんな引継をされているのか分からないが、ユネスコ創造都市については、歯がゆくて仕方がないというのが本音である。確実に行くのだということを決めたのであれば、それに対するプロセスも、時系列をもって、成果をちゃんと世界に向かってアピールできるような資料を作っていくべきである。ちょっと今、輪郭が緩みかかって、消えかかっているという印象である。

【委員】

先の意見に賛同させていただきたい。会長にも、本審議会委員として御就任いただいております、3年ぐらい前に、ユネスコ創造都市ネットワークに入るか入らないかという議論があったと思うが、立ち消えになってしまって残念だと思っていた。今回、来年もまたチャンスがあるということだが、このネットワークに参加しようということについて、事務局である市として、現段階でどの程度考えておられるのか伺いたい。私はずっとこの審議会に関わらせていただいているが、委員としては、是非、このネットワークに参画させていただきたいと強く思っている。

【事務局】

ユネスコ創造都市ネットワークに参加する現段階の考え方について

は、先ほどの参考資料に対してお答えした内容のとおりである。ネットワークに参加していこうとなったときに、どの分野なのかというところがある。実際のところは、その前段階で、分野の選定や認定に必要なソフト事業やハード施設といった要素が十分ではないという議論が市内部でもあり、まずは、現在、取り組んでいる創造都市を推進するための各種事業を着実に執行していき、創造都市高松としての熟度を高めていくという方針である。その先に、ユネスコ創造都市ネットワークへの申請も視野に入れながら、創造都市の推進を図っていくという判断の下で、現在、申請を見合わせているが、今後、来年が申請受付年であるというところも視野に入れ、皆様から御意見をいただきながら、どういう方向性でいくのかについて、市内部で協議を進めていきたいと考えている。

【会長】

これはタイミングというものがあるので、来年の申請に向けて、あまり意思決定を延ばさない方がいい。例えば、次回の審議会に向けて、その可能性等、御意見をいただいた委員からも、もう少し個別に詳しく話を聞くなど、7つの分野のどの分野で申請したらいいかという点も含めて、さらに踏み込んだ話を、これからしていただくということで、今、受け止めてよいか。

【事務局】

御意見をいただいた中で、市側で協議した上で、もう一度、方向性について議論してまいりたい。その時に、次の第5期の委員の方からも御意見を聴きながら、今後検討をさせていただきたい。

【委員】

今、御説明があったが、いろいろ検討するというのではなくて、冒頭にも、むしろ今は、いろいろなものを見直しするチャンスだとおっしゃっていただいたように、私もまさしく、そのとおりだと思う。インバウンドにしても、物理的に動くということができない段階なので、いろいろなことを真剣に考え直して、落ち着いてきたときにやれるようなことを考えようとする、むしろ、チャンスだと思っていただきたい。これをやろうという審議会のメンバーの強い熱意だということを、是非、伝えてもらい、進めていくと同時に、いろいろな協議をする中で、いろいろ

なアイデアも出てくると思う。考えてからやろうではなくて、環境を整えながらやっていこうというように、是非、やってほしい。

【委員】

いろいろと準備が必要だということで、申請するために大変な労力があるということだろうが、香川大学で2年ほど前に創造工学部というものを作っており、「メディアデザインコース」というコースを新しく作っている。東京藝術大学の方を招いたり、プロダクトデザインの設計をしたり、新しい人材育成にチャレンジしているのだが、もし、ユネスコ創造都市ネットワークに工芸部門で申請していくということであれば、デザイナーなどといった点などで、お手伝いさせていただくことができるのではないかと考えており、大変だと思うが、もし、出来ることがあれば、このプロジェクトをお手伝いさせていただきたい。

【会長】

今、いただいている御意見は、次の計画とも関係があり、大きな重要なテーマだと思うので、是非、深く議論していただきたい。

【委員】

先ほど事務局から御回答いただいた件で、補足だが、今イベントをやっている人を増やしていくためには、例えば、ユネスコ創造都市であったり、さらに日本国内でもこだわらず、世界の素晴らしい都市のまちづくりや素晴らしい人だったり、発信の仕方や在り方を真似ることによって、今あるものを、もっとより良くしていくこと、そして、それに慣れるというか、組織の皆さんの意識の中で、これならユネスコ創造都市に必ず申請できるというところまでもっていくには、やはり、もう少し高い視点を取り入れて、もっとより良くしていかないといけないと思う。市民の方がこうやると、ものすごく素晴らしいものになるという、一人の創造がたくさんの地域の方を巻き込んで、交通から商業まで全て巻き込んで、今、長い年月を経て、より良くしていかないといけない。同じように、やはり、良いものをどんどん取り入れて、より良くすることで、高い目標に向かって突き進むことなどが、すごく大事なことなのではと思う。こなすだけではなくて、こなす仕方や在り方といった細部まで考える必要があると思っている。

【会長】

創造都市事業をやってきて、そのステップのレベルを上げると、目標を高くすると、その時、ユネスコという問題が、もっと近くなるかもしれないという御意見である。海外の都市の事例等を調査し、市民に広げることや、あるいは、担当の人たちが、直接、海外に調査に赴くなど、もっとやり方はあると思うが、考えられないかというところである。前向きに考えていただけたらと思う。

参考資料 1 - 2 の中にも指摘されていたが、伝統工芸のミュージアムなどができれば素晴らしいことだが、これをさらに工芸のホットスポットとして発信していく戦略も、まだまだ、やることがあるのではないか。そこに、新しいデザインや見せ方などの工夫が必要になってくるとも考えられる。実は、金沢市では、国立工芸館が東京から移転し出来ることになっているが、そういう取組にも刺激を受けながら、高松市として、もっと工芸のこれからの事業展開を考えていくべきだと思う。

【委員】

補足をすると、ここに京都の事例を挙げさせていただいている。京都伝統産業ミュージアムは、新しい建物を建てたわけではなく、既存の建物の中に、こういった施設を設けており、専任の職員ではなく嘱託という形で運営されている。既存のマンパワーという意味では、高松市の中でもいろいろな方がいらっしゃるし、いろんな既存の施設の保存という意味でも、何かイベントをできる場があるのではないかと考えている。この創造都市推進審議会は、事業の発案をする場所ではないと思うが、そういった方たちをイベント等で尋ねて、話をされるような機会は考えられるのではないか。

【事務局】

本市でも、伝統工芸の普及・啓発や事業者支援をしているところであるが、県とも連携をしながら進めているところであり、また、先ほども御説明した「たかまつ工芸ウィーク」で、商工組合や協同組合、販売店の方々と一緒に高松の工芸をPRしていこうということで実行委員会を立ち上げており、昨年度では、講師の方をお呼びしたセミナーといった形で開催をしており、そういった中で、いただいた御意見も参考にさせ

ていただきながら、今後の展開について考えていきたいと思っている。

【委員】

ずっと思っていることは、このユネスコ申請のあるかないかも含めて、それなりに高松は恵まれていて、音楽はピアノコンクールなど一生懸命やっていらっしゃる方がいて、映画も県の事業であるが「さぬき映画祭」がある。その代わりに、どれをとってもそれなりに頑張っているのです、じゃあ、どれで行くのだからということで、すくんでしまう。それから、産業部門の中でも、それなりにやっているけれども、世界の目から見ると、どれほどのものなのか分からないといったところで、何か一つ自信をなくしてらっしゃる。

考えてみたら、約10年前に瀬戸芸の第一回目が始まり、大地の芸術祭の北川フラム氏に来ていただいて、瀬戸内海で芸術祭をやろう、現代美術の祭典をやるのだということで始まったわけだが、これを実はやったのは県なので、高松市が大きな顔をして「うちの事業なんです」と言わないのは自信がないからだとは私には思っているのだが、世界から見ると、やっているのは高松のポートタウンで始まって、各島に行っているわけである。もっと、そのキーになる重要なところを高松がしっかりと握れば、現代美術の祭典をやっているまちであると打ち出していくことで、工芸も音楽も映画も、そこについてきて、世界の認識になっていくのだろうと思う。非常に感染力の強いアートの祭典を、ポートタウン高松でやっているということを中心にして、上手く産業施策の展開を文化芸術の展開につなげていく戦略に使ってはいかがか。ヴェネツィアだってヴェネツィアのまちで芸術祭をやっていることによって、観光産業がさかんであることは間違いない事実であるし、例えば、横浜トリエンナーレは、ずいぶん前から開催されているが、じゃあ、あれが横浜の顔になっているかということ、ずっと瀬戸芸の方が瀬戸内の顔となる出来事だと思う。本当に海外の評価が高い瀬戸内国際芸術祭をやっているまちだと、そういった気概で、進めていかれてはどうか。

【委員】

伝統工芸の話が出たので、盆栽、漆、庵治石などいろいろと活動しているが、今思えばコロナ禍に入って、全てが変わったように思っている。10年ぐらい前から、クールジャパンの流れからインバウンド政策

を政府が打ち出して、盆栽もクールジャパンのおかげで、台湾やシンガポールなどのいろいろなところで、日本の文化として紹介をさせていただいた。インバウンド政策を打ち出した10年間は、外国をターゲットにした時代だったと思うが、その中でコロナ禍が来て、一気に世界観が変わった。コロナの前の昨年11月や12月には、まだまだインバウンド施策も出ていたし、皆さんも御承知のとおり大阪などは外国人ばかりで、インバウンド真っ盛りであり、盆栽もマーケットがグローバルで、80%以上の仕入れが外国であった。そういった中で、コロナ禍に入って、職人も含めて、仕入れてくれる外国の方が来られない状態に直面しており、ZOOMを使ったやりとりなどを行っているが、それでもやはり大幅に激減している。

この中で、もう一回原点に戻って、内需というものを、もっと考えることがあるのではないかという気持ちになっている。もっと国内の人に、もっと伝える努力を10年間さぼっていたのではないか。外国の人に簡単に物が売れる、日本人より高く買ってくれる。この10年間は、ずっとそうだったかもしれないけれども、こういったコロナ禍は、文化を日本の人に伝える努力を怠ったつけないのではないかと。チャンスと言ったらおかしいかもしれないが、準備段階だととらえて、もう一度、香川県内の人や国内の人にも文化を伝え、継承して行って、どんどん職人さんは辞めていっている人も多いが、職人の技術を継承していき、そういった職人を絶やさずに、文化をつないでいくことを考えさせていただいている機会だと思っている。本当に、すごくよいチャンスをいただいていると思って、この一年間、もう一度、日本の近隣の方、国内も含めてだが、体験していただくとか、もう一回、原点に戻って文化を言葉にしていくことに取り組んでいきたい。

【会長】

全く同感である。この数年間はインバウンドがあって、足元を見つめ直すということが少なかったので、今後、高松が持っている文化的な資源をきちんと共有して、そしてそれを担っていく。それをしながら、次の戦略に結びつける。これを機会と捉えて、頭を冷やして次の飛躍に向かう。

【委員】

今、音楽業界の方が、今年、コンサートなどが軒並み中止になっており、音響や照明といった裏方業界が秋まで持たないという状況まできている。そこで、演劇界を始め、いろいろな業界の人たちが立ち上がって、「讃岐ブルーアート」という組織を立ち上げている。先日、ドライブインシアターができるところから集めて、コンサートの開催は徐々に行ってはいるが、従来のような観客が満席というわけにはいかず、客席の半分のみを使用していたりする。開催はできても、それができるかどうかというところに来ている。

資料では、「学校巡回教室」も継続にはなっているが、学校も密なので、オンラインとかりモート演奏という方法もあるが、やはり生の演奏ではない。動画配信だと、家でもどこでも見られるかもしれないが、個人に直に伝えるにはどうしたらいいか、私たち業界もどうすればいいか考えているし、高松市の方でもどういう新しい形式で、新型コロナウイルス感染症を乗り越えていけばいいのか、一緒に考えていって行けたらと思う。

3 議題（2）新型コロナウイルス感染症の影響と主な対応について

【会長】

御意見の内容が議題（2）に移ってきているので、ここで、会議として議題（2）に移りたいと思う。それでは、事務局から配布資料の説明を願いたい。

【事務局】

（配布資料について説明）

【会長】

特に舞台芸術の関係で、事業の中止に伴う大きな被害が、アーティストにしわ寄せが来ていて、それに対して、政府官庁も緊急の持続化のための補正予算を組んで、高松市においても、同様の努力をされている。金沢市では、伝統工芸の分野を特に手厚く支援している。今、創造都市推進ビジョンとして、ウィズコロナ及びアフターコロナに向けた事業の展開ということで、まずは御意見をいただきたい。

【委員】

議題（１）で、ZOOM とかオンラインで様々な対応をされている中、今後の在り方として、全体的に緊急時としてオンラインという対策を考える必要があるだろう。

【委員】

参考資料に記載のとおりであるが、対面の事業の参加人数の制限がされている中で、通常、評価をするときには、参加者の人数といったものが前面に出てきたと思うが、そういった評価を考えると、参加人数で評価することができなくなる時に、そのあたりも含めて、どのようなことを考えられているかお伺いしたい。

【会長】

これについて、事務局から、今、考えられていること等あれば、お答え願いたい。

【事務局】

新型コロナウイルス感染症拡大防止を踏まえた事業の参加人数の制限等については、本市では、「高松市主催のイベント・行事等の開催基準」を策定し、基本的な考え方として、7月31日までは屋内・屋外ともに人数上限を「5,000人」と定めているが、来月8月1日を目途に上限がなくなる予定である。

全庁的に統一された新型コロナ感染症を受けての「目標設定の変更」の考えはなく、第2次高松市創造都市推進ビジョンにおいては、目標値の設定をせず、各成果指標の現況値からの向上を目指すこととしており、成果指標の中には「観客数」などの指標も含まれているが、引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止策を講じながら、現況値からの向上に努めていきたいと考えている。

【会長】

特に大都市圏と地方圏の状況で具体的に違いがあるので、そこでどんな基準を設ける。それから、おそらくイベントの中身も種類によって違いがあるということで、細かく分類しないといけないだろう。目標数値をずっと同じようにするという事はないと思うので、評価指標につい

ても、事業が円滑に進むように工夫をしていただきたいと思います。

この後は総合的に御意見をいただく機会にしていきたいと思う。私は今、大学で遠隔授業をやっているので、個人的に思っていることは、少数で対面で行う授業は、何とか工夫して残ると思うが、従来のような大講義室のようなところで、100人、200人を相手にする授業は、これからなくなっていくのではないかということである。というのもグローバル配信で例えば14回、15回講義をしていくとすると、学生からすると、自宅で自分の好きなタイミングで授業が聞けて、繰り返し見ることできる。しかも、教室の中の騒音もないのですごく分かりやすいという意外と新鮮な意見もあり、対面授業とリモート授業を組み合わせたハイブリット型の授業のような形も展開していくと、大学というキャンパスの在り方も考えていったら面白いと思う。

一方で、今回、国が大企業を中心にリモートワークを推進している。そうすると、通勤しないといけないということがなくなるので、しかも、東京のオフィスに出ていかないといけないこともなくなるので、ある意味では、これまで東京で行われていた仕事が、東京を離れて地方で行われるようになる。テレワークが、今回さらに進むというのは間違いはないだろう。その時、今まで東京に集中していた傾向を逆転させて、地方に分散させることが、すごく大きな、ウィズコロナ及びアフターコロナの課題だと考えると、リモートワークが進んでいく中で創造都市高松はどのようなチャンスがあって、どんな施策を打ち出していったら人口の流れを変えられるか、東京集中の流れを変えられるのか。幸か不幸か、東京オリンピックが普通に開催されていたら、さらに東京集中が進むと言われていたが、どうも、そんな心配がなくなってきたので、さらなる東京集中よりも、むしろ、地方分散の流れが起きようとしている。その分散の中で、高松のような中核市で、どのように個性的な展開できるか、どんな事業でどのように打ち出したらよいのかといった知恵が欲しい。その時に、例えば、ユネスコ創造都市というブランドも必要になるだろうし、あるいは、もっと先端的な考え方があっていいかと思っている。

一方で今、危機は危機なのだが、この危機をチャンスに変える取組や発想を含めて御意見をいただければありがたい。

【委員】

今おっしゃられたことについて、どうやって、そういう人たちが知恵を絞って、高松に協力してくれるか、また、危機を察して対応することについて、私は全然知識がなく、提案できる立場ではないが、今日も、本当に皆さんの話についていっただけで精一杯である。皆、この高松のことを愛していて、よくしていこうとする姿勢は、ものすごく自分にとっても勉強になっている。今日、今回の議題とは直接結びつかないと思うが、1つだけ高松市に知っていただきたいことがあって、それだけ共有できたらと思っている。どこまで関係あるか分からないが、この創造都市の中で、こういう高松市になると、すごく外国人のためにも住みやすく、すごく活気のある場所になっていくと、一員として、この話を聞いていたが、このコロナになって1つかなりショックになったことがある。高松市は外国人を一員として、考えてくださっていると信じているのだが、国は、そうではないということがちょっとあり、外国人であって、日本に永住権を持っていても、家族が日本人であって、自分の仕事を持っているとしても、一旦、日本を出たら、日本に戻れないという状況であり、私だけでなく、日本に住んでいる外国人はすごくショックを受けている。共存とか一緒にやっといこうと言っているけど、本音はそうではないと映ってしまっている。本当に、この国が好きで、ここで最後までいて、貢献したいという、たくさん外国人がいる。日本の文化も大好きで、その文化を世界に伝えたいし、いろんな話をしたいと思っているのに、こういうコロナ禍になって、日本国籍じゃないから、おそらく、ワクチンができるまでは国には入れてあげないとなっていることが、皆イメージとかブランド力とか言っていたが、すごく傷つくわけである。G7の中でも日本だけである。永住権を持っていても日本に帰れないという状況なので、高松市に、アフターコロナでも、コロナ中でも、1つ、気を使ってほしいところがある。学生として、仕事として、日本の家族がいたりする外国人を一人の人間として、是非、見てあげて、今、どこが困っているのか、今、どういう状況なのかを気を配っていただきたい。高松市の大事な人材だと思ってあげてほしい。外国人をいじめたいからやっているとは、思っていないが、それを見えてないということがショックだった。国籍だけで決めつけられており、なぜ、帰りたいかという、自分たちの家族が、今、すごく大変で、助けに行かないといけなのに、行ってしまおうと日本に戻れなくて、すごく大変になるし、他の国には自分の居場所がない。行っても、帰れないところ

をさまよう難民状態になる。それを想像できなかった日本の政府に対しては、がっかりだと思ってしまう。この場で言うことが分からないが、創造都市のことを考えると、これからここに住む未来のための構想なので、それだけでも、皆さんに知っていただけたらと思いお話をさせていただいた。

【会長】

これは、国の構えが本当に同和化していないということであろう。基本的人権に関わることなので、コロナ禍の中、入国管理を緻密にやってしまうと、いろいろなジレンマが生まれるので、これは1自治体で解決することではないが、何か機会があれば発言を続けていただき、こういう人たちがいるのだということを強く伝えていただきたい。是非、今回、記録していただきたいと思う。今の御意見は、我々としても、重く受け止めるということにさせていただきたい。

【委員】

コロナ禍が始まって、いろいろ、考えさせられていたところだが、今まで、私たちがずっと当たり前だと思っていたことが、そうではないという、いろんな事が出てくるわけだが、それはある意味では、いい勉強になるわけだが、将来を見据えたときに、それをどう捉えて先に進むかが重要なのかと思う。私の大学では、最初の5回はリモートで行い、後は対面ですずっとやっているわけだが、やはりリモートでやると、それはそれで、面白いことがたくさん見えて来て、それまで考えてこなかったような教育方法もあるということも知ることができた。やはり、一教師としては、学生が目の前にいるということが、どれほど大切なことかということ、皆に会うたびに、非常に新鮮な教育の原点として、どういう手段でも構わないが、そこに人がいるという結果を持たないと、できないのだということが分かった。

文化芸術の領域に関しても、そういう意味では、これまでの御意見にもあったように、今回のことで大変な状況に遭われている方もいらっしゃるということだが、文化とは何か、そんなもの必要ではなのではないかというようなことをずっと言ってきた人たちの意見は正しかったのではないかなどと書いていたり、人間生活の根幹のところ、つながること、それだけでは生きていけず、もう少し違う栄養素がいるのだという

ことが再発見できて、そういう意味では、いろいろな勉強になった。

具体的には、中止になった授業とかいろいろあるが、私の今の結論としては、やれることをやるしかない、その流れで新しい形というのが出てくるし、考えさせられるのは、今までどの時代もそうだが、前の時代にやってきたものを、そのまま受け継いできたわけではないし、前の人たちがやってきていた根幹みたいところを技術として受け継いできたわけであって、それを今回のような時代の中で、それに対応するような努力を積み重なってきたということである。一番、根元にあるのは、生きるという根底があるわけだが、その生きるということは、ただ生きるのではなくて、違うように生きるのだ、そのためにはどうすればいいのかということをお皆で考えてきたわけで、このコロナの時代でも、それをもう一回、取り直していこうという契機というか、チャンスと捉えることもできる。

そういう視点から見ると、今までずっと、文化芸術活動関係に対して、素晴らしいプログラムに当たるものに対して、それぞれを、もう一回、新しい時代の形にどのようにすれば、今より良くなるかを一つ一つ検証していかないといけない。改めて見たときに、私は根幹に戻るようなプログラムが、やはり必要なのではないかと考えている。実は、今年の暮れに、韓国や中国で、巨大なコンサートをやろうと思って計画をしていたが、巨大なコンサートはできないが、コンサートをしようとするフェスですら、皆で、それを勉強していくプログラムを作り上げて、小さくてもいいので、これからも過程になるようなプログラムを積み重ねていくということを取り組んでいかないといけないと考えている。

そんなときに、ユネスコの問題もあるわけだが、そういうところに参加することによって、さらに様々なこういうときにこういう対応ができるというのが見えるチャンスはあるのだろうと思う。新しいことを作り出していくといったことが問われている。実際は、現場でやっておられる方にとっては、大変な作業であるが、捨てるものは捨てないといけないし、新しいものを作り出すプログラムを1つでも2つでも作り上げていかないといけない。こういう状況は、そうはないわけで、これを機会にして、もう少し、先へ行って、ものを作らないといけない。その時に、たった1つの部分は、どうやってもつながらないとできず、小さく分解していったら、そういうつながりを外してしまったら、できなくなってしまう。巨大なものをできないけども、分解して1つ1つの部分で

は、いくつかのことをやって展開できるということができれば、進めていけばよいのではないかと思う。

【委員】

私自身、たかまつ国際古楽祭を4月に開催する予定だったが、当初の延期から、今は完全になくなってしまい、東京の映画祭に参加する予定だったものもなくなってしまったりして、本当にガラッと変わってしまった感じである。早くに切り替えて、リモートで会議に参加したり、出張以外は在宅ワークだったりするが、実は、まんのう町をPRするショートムービーを作っているが、それをハイブリット型上映で、8月31日に会場とオンラインで上映していただけることになり、まんのう町の職員の方に、まんのう町をPRするためにゲストで来てくださいとお伝えしたが、ZOOMに町のインターネットからアクセスできず、参加できないと言われたことがある。もしこういうことがあったときに、高松市の場合は、すぐに市をPRできる状態なのか、個人的に疑問をもっている。

また、今、オンラインセミナーというものがたくさんあり、仕事で、四国中のコンサルティングをすることになっており、本当は四国中を回らないといけないのだが、結局、オンライン会議で対応したり、セミナーのようなものもこれからやっていこうかと思っているが、例えば先ほどのユネスコの話があったが、最近、にわかにオンラインセミナーというものがすごく広がっていて、私自身、参加することも、講師をすることもあるのだが、例えば、オリンピックがなくなりました、これからどうなるか分からないというところで、オンラインで発信していく手法というものも、絶対に、これから考えていかないといけないと思う。例えば、自治体発信の高松市のオンラインセミナーの枠を作って、盆栽のことを語っていただくオンラインセミナーの時間があったり、アーカイブでは、翻訳もついて世界中で発信できるような、国内で初めて市としてのオンラインセミナー、例えば市民の方は無料で受けられて、市以外の方は有料といった形で、市の方にも講師の芸術士の方にも、お金が落ちるような仕組みを作ったらどうかと思う。ユーチューブは、今、皆さん家にいるからユーチューブを見ていると思うが、トップのユーチューバーは、子ども向けのユーチューブをしている人がほとんどである。子ども向けのチャンネルは何回も繰り返し見たりして、親が家事をしている

間にかなり回転するようで、芸術士の方に高松市を伝えるようなチャンネルを作って、いち早く、こういったPRに取り組んではどうかと思った。

【会長】

今、具体的な提案をいただいたが、例えば、創造都市オンラインセミナーといった形で、委員の皆さんにも、それぞれのジャンルで創造都市についてお話しただいて、それを市民には無料で公表するようなことをやれるようになったらとてもよいと思う。やはり、対面で集まって、いろいろなことを語り合う時間がとれないということが課題として大きいので、創造都市政策で、最近、どういうことを考えているかということをもっと広げていくという御意見だと思う。私も大学の講義で作っているものもあるので、御協力できるかと思うので、委員の皆さんも、是非、何かあれば御協力いただいて、よい発信の仕方を御提案いただいたかと思う。

【委員】

もう少しリアルな話を申しあげると、本日の配布資料にも芸術士派遣事業について記載されているが、残念ながら、高松市は、昨年、予算編成時に7%減のシーリングを設定せざるを得ない状況になっており、本日、私からお配りした保護者向けのアンケートを、今年度、初めてやることにした。高松市内の全ての保育園の年長さんの保護者の方にお配りして、中には、お断りされた園もあったが、だいたい3,500件ほどのアンケートを配布して、今日の段階で1,050件のアンケートが帰ってきている。中には、このコロナの影響で園が自粛したり、通園したくてもできなかった子どもたちもいたりするので、その時の様子に関する質問項目もあえて入れて聞いている。結果は、大体予想通りの結果が見えており、芸術士のことを知らない保護者の方にも、私たちの考え方を分かっていただけのような質問項目もあえて入れているので、御理解を賜っている。このアンケートを資料として、来年度のシーリングに戦っていこうと思っている。

先ほどの御意見のようなオンラインセミナーのようなものもやろうという話で進んでおり、5月にイタリアのレッジョ・エミリア市に行く予定だったが、このコロナで中止になり、そうすると今度はそのレッジ

ヨ・エミリア市のセンターの方から、オンラインセミナーの案内が来た。出席者を決め、契約や内容の翻訳という作業をしながら、みんなに伝えていくということをしている。また、年間10回程度、芸術士の現場を見たいという行政や教育系の関係者の方、学生の方、いろんなユニットで、施設見学の申込があったのだが、こんな状態なのでそういったことはなくなっている。それを改善するために、映像でいくつかの園を取材して、9月からオンライン視察会をやるようとしている。そうすると、よりリアルに園の現場が映像として紹介しながら、後で、ZOOMでディスカッションしていくというプログラムで進めようとしている。

【会長】

この事業は、創造都市高松のシンボル事業であるから、そこに対する市の助成がカットされてくるようになれば、非常にダメージが大きいので、私からもお願いしておく。それを広く市民向けに応援いただこうとして、発信をしていくという時代なので、そこにマッチするようなことになれば支持が広まるし、問題は、インパクトのある映像資料にできるかどうか、そういうクオリティを上げるような助成が必要になる。アマチュアでやっていると、あまり印象に残るような映像にならないので、できればそういった予算は、何か工夫していただくとよいと思うし、クリエイターの方の仕事になってくるのではないかと思う。そういった映像による情報の発信のクオリティを上げるための事業を創造都市高松の事業として、工夫してはどうか。

【委員】

外国人の上陸拒否の話が心に残っており、私も創造都市推進局という組織ができて、委員も何年もやらせていただいたのだが、本当にダイバーシティというか多様性ということがすごく、創造都市というかイノベーションに大切なポイントだと思っている。本当にこの創造都市推進局ができて、市長も、市報の裏にダイバーシティという言葉が何回か出てきたが、これが本当に実行できているのか、出来ていないのかというのが、日本人としては難しいと思う。

私も今年になって、近くに知的障がい者の施設があるのだが、向こうから「草むしりさせてください」との申出があり、私自身、対応できるか不安だったが、草むしりに10人ぐらい来ていただいて、併せて、盆

裁の芽切りという少し高度な作業も体験してみようということで、1か月体験していただいた。コミュニケーションの難しい子もいらっしやっただが、その中でも、作業が本当に過酷な作業で、私はいつもしかめ面で8時間、10時間作業をしていたが、彼らは非常に楽しそうに作業をやっていたわけである。なぜ、そんなに楽しそうに作業しているのかと考えて、ひょっとすると、これは楽しい作業なのではないかと思うようになって作業をするようになり、私にとって有意義な体験だった。逆に私が気づきを与えられて、とても幸せになった。すごく集中力もあって、お話も聞いていただいて難しい作業だったが、来年も、是非、チャレンジしたいということで、私も職人というか、日本を代表する文化を習得して、自慢できる存在感のある人になってほしいということで、来年も、是非、体験していただきたい。私は、当初、心を閉ざしていたが、いろんな方と出会いがあり、多様性の中にイノベーションではないが、何かが見出せるものがあるということに、非常に気付かされた。こういった創造都市推進局という名の下、素晴らしいチームがあるので、是非、真の多様性を図っていけば、高松は素晴らしいまちになると思う。

【会長】

共生の話と、障がいのある方と伝統工芸、こういうものとの結びつき、それが新しい創造都市ビジョンの一つになっていくのではないか。例えば、京都市は、後継者のいない職人の方のところに、障がいを持っているけども熱心な方に支援をするという、伝統産業と福祉を掛け合わせる「伝福連携」と言っている。多様性のある社会包摂型の新しい要素になってくる可能性があるので、是非、何かパイロットプロジェクトのような形で、次年度又は今年度、緊急に始められてもいいと思う。

【委員】

手短に紹介させていただくと、今、職人の話があったが、私自身、高松市で廃校になった塩江の小学校をお借りして、4年ぐらい前に建設業の職人を育成している事業を現在やっている。お配りしたリーフレットの中に、本審議会委員宛の文書を1枚挟んでいる。内容としては、高松市の知恵を受けて、現在まで7回開講し、今までに117名卒業されて、100名以上の方が建設業の職人として、企業に採用されるというものである。おかげ様で、塩江地区の皆様方とも、非常によい連携を取

りながら、地域への連携をさせていただいている。今年も厚生労働省の建設労働者緊急育成支援事業を受託して、やりかけていたが、残念ながらコロナの影響で、12月開講にずらして、案内や説明会がほとんどPRする機会がなかった。自分でやりたい仕事を見つけると、本当に真剣になってやって職人として頑張っていく、そういう人たちをこれからも育てていきたいと思ってやっているの、皆さん方も良ければ御紹介いただけると幸いです。

【副会長】

高松商工会議所では、今年2月に140周年を迎えたところである。140周年記念としてロゴを新しくしたところであり、デザイナーに頼み、盆栽のきれいなデザインにいただいた。やはり、高松市としても盆栽に力を入れており、「Go To キャンペーン」では、国内の旅行者が多くなるので、高松市内の中心市街地に、もう少し、盆栽の展示があってもいいのではないかと思う。

また、夕方、帰宅していると、歩いている方々と自転車を利用している方が増えたように見え、高松市は上手に自転車道路を住み分けていただいているが、時々、危ないと思うこともあるので、自転車道路をしっかりと分離することは、今後、大事なことになると思う。

また、少しずつ人間が小さくなってきているような気がしており、経済が圧迫され、自粛で家に閉じこもっていると自信が落ちてくる。ユネスコの創造都市の話聞き、こういう大きなところを設定すること、夢を挙げていくことも大事なことだと思う。きっと、コロナが及ぼす経済への影響というのは私たちが思っている以上のものがあると思う。それに対して皆で、高松というまちは大変住みやすいまちなので、しっかりとこれをPRして、移住者を増やして、自然災害が少ない恵まれたまちだと思うので、しっかりと、移住者の方にもプロモーションビデオを宣伝なさせて、よいまちであることをしっかりとアナウンスしていただきたい。

【会長】

閉塞感の中では、どうしても自分思考になり、やはり、志や目標設定を高くしておかないと、この蟻地獄みたいな感覚から中々脱出できないので、そういった意味で、ユネスコ創造都市という大きい目標は、我々

が夢を持つという大事なものになるのだろうと思った次第である。

それでは、これにて本日の会議を閉会としたい。

3 閉会

【事務局】

委員の皆様方においては、大変御多忙の中、2年間にわたり、商工業、農林水産業を始めとする産業の活動と文化芸術活動等を豊かな創造性を通じて融合させることにより、本市のまちづくりに新しい魅力と活力を生み出し、もって創造都市の実現に寄与するため、「SDGsへの貢献」を始め、各分野の知見から様々な御意見をいただき、誠に感謝申しあげる。

本市の創造都市の推進について、昨年には、米ニューヨークタイムズにおいて、「2019年に行くべき52か所」の第7位に、日本で唯一「瀬戸内の島々」が選ばれたことや、本年には、ブッキングドットコムやスカイスキャナーといった世界有数の旅行サイトの旅行先ランキングにおいて、日本で唯一トップテンに選ばれるなど、本市に対する注目度が世界中から高まるという成果が得られる中、「瀬戸の都・高松」の知名度やブランドイメージの更なる向上に努めていく予定のところ、御承知のとおり、新型コロナウイルス感染症の影響により、本市の各種イベント等が中止又は延期になるほか、市内の文化芸術活動のみならず、産業活動においても多大な影響が及ぼされているところである。

当局においても、テナント賃料給付金や文化芸術団体等への支援を始めとした特別対策に取り組んでいるところであるが、今後においては、ウィズコロナ・アフターコロナ時代に適応しながら、各種創造的な事業を展開していき、第2次高松市創造都市推進ビジョンに掲げた「魅力にあふれ、人が輝く創造都市」の実現を着実に推し進めてまいりたいと考えているので、委員の皆様方においては、引き続き、第5期審議会においても、御助言や御指導をいただきたい旨お願い申しあげ、御挨拶とさせていただきます。

(閉会)